



「近現代のドイツ哲学の研究」

ー ライプニッツ、カント、ハイデッガーを中心として ー

学 習 院 大 学

【 文学部 哲学科 教授 酒井 潔 】

研究者紹介

ライプニッツ、カント、ハイデッガーを中心として、近現代のドイツ哲学について形而上学、現象学、比較思想の3つのアプローチから研究を進めている。特に、2009年に「日本ライプニッツ協会」を設立し、同協会の会長としてライプニッツ研究の一層の興隆と人的交流、海外の研究者/研究機関等とのネットワーク作り、および後進世代の育成に努めている。

【キーワード：哲学/哲学史、ライプニッツ、カント、ハイデッガー、西田幾多郎】

本研究の目的・内容

近現代のドイツ系哲学の研究における事例の1つとして、ゴットフリート・ヴィルヘルム・ライプニッツ(Gottfried Wilhelm Leibniz、1646-1716)の業績について、新たに明らかになった情報や史資料等を基にした検討・再評価を進めている。

ライプニッツは、デカルトの後の合理主義における哲学者であり、かつ微分積分学や二進法を確立した数学者、宮廷顧問官(現在の裁判官や官僚)、法学や歴史学(アーカイブス学)等、哲学の他にも多くの分野で著名な業績を残した。

そのような経緯もあって、ライプニッツの業績については特に「論理学」と「数学」に関心が集中しており、評価もそれらに偏っていた。しかし、最近になって、ドイツの国家事業としてライプニッツの遺稿や関連史料類が翻刻、編纂、出版されるようになった結果、ライプニッツに関する多くの新たな事実や情報等が明らかになってきた。

そこで、この新事実・新情報もふまえて、ライプニッツの偏った受容を見直し、彼の業績を改めて検討/再評価すべきと考えた。その結果、例えば1)「パースペクティブ(表出)」、2)「アナロジー(アナログイア)」、3)「正義」概念のいずれにおいても、狭義の合理主義の評価では収まらない人間の意志を含む哲学的多様性を認めることができることがわかった。

本研究の新規性・優位性、成果の応用・活用

このように、ライプニッツの思想と活動については新しい哲学的な解釈/理解を創出できることがわかった。

近代合理主義はものの考え方を狭めてしまったが、ライプニッツの合理主義はソフトナショナリティと評されているように、例えば「全て真なるものは共鳴しあう(コンソナーレ)」と、物事には多様性が存在し、かつ調和していると捉えた。

ライプニッツは、現代人に、生きるうえでの物事の考え方や捉え方のヒントを与えている、と思われる。

主な研究業績

【論文】・初期ライプニッツの「正義」概念—「衡平」aequitasを中心に、イギリス哲学研究, (40) 5-17, 2017年 他論文計51篇

【著書】・「ライプニッツ著作集 第二期」(監修・解説) 第1巻「哲学書簡」2015年, 第2巻「法学・神学・歴史学」2016年 工作舎

・「改訂 考える福祉」(編集・分担執筆(第8章「家族福祉から「共生」を考える」)) 東洋館出版社 2016年

・「ライプニッツ〔新装版〕」清水書院 2014年

・「自我の哲学史」講談社(現代新書) 2005年 他著書計36冊

応対できる研究・企業等への希望

1. 共同研究
2. 受託研究/評価試験
3. 学術指導/コンサルティング
4. 講演/出張講義
5. 寄付金受入
6. 報道等の取材/出演
7. その他(哲学関連の書籍出版)

研究者より:

- ・哲学・哲学史に関連するご依頼を歓迎いたします(例えば、ライプニッツ、西田幾多郎など)。
- ・企業での講習会、自治体等での生涯学習、大学オープンカレッジ等での講師歴はあります。
- ・哲学で大切なことはただ一点、すなわち「考えることが好き」、これに尽きると思います。

【お問い合わせ】

学習院大学 研究支援センター 〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1

TEL: 03-5992-1228 Mail: Ken9-off@gakushuin.ac.jp

URL: <http://www.gakushuin.ac.jp/univ/research/index.html>



学習院大学 広報大使

さくまサン

©'12-'18 GAKUSHUIN